

こざん刺しとは、刺子の一種類ですが、

一般的に知られている刺子とは違い

布地の横糸に沿って縦糸の本数を数えながら

刺していくという方法が取られております。

刺子の多くが補強・保温を目的に刺されていたように、

こざん刺しも目的は同じで、藩政時代には農民は、

古着以外の綿布の着用が禁じられておりました。

その為、自生する麻や苧麻を用いて着物を作り、

その胸と背の部分にこざん刺しを使用したのです。

歴史的には「こざん」という言葉として今一番古いものは、

元禄八(1695)年の津軽藩藩政日記に見られますが、

これは現在残されているような「こざん」であったかどうかは、定かではありません。

その後「奥民図彙」(平野貞彦)の中に

「サシコギヌ、布を糸にてさまざまな模様刺すなり、

其見事なり、男女共に着す多くは紺地に白き糸を以って刺す」と

文章と絵とで示された資料により

天明八(1788)年頃には今に残る刺し方は完成されていたと思われます。

江戸時代中期から明治に入ると木綿糸が農民にも手に入りやすくなり

豪華なこざんが競って刺されるようになりました。

その結果、地域で異なる

東こざん・西こざん・三縞こざん、と

大別される文様が今に伝えられております。



しかし汽車の開通により

安価で大量の綿布が入るようになると

手間のかかるこざんを刺す人が

途絶え衰退の一途をたどる事となったのです。

昭和7年(1932)「工芸」14号 柳宗悦著による

「名もない津軽の女達よ、よく是程のものを遺してくれた。

麻と木綿とは絹の使用を禁じられた土民の布であった。

だがその虐げられた禁制の中で是程美しいものを生んでくれた。

それを幸な不幸と云うか、又は不幸な幸と呼ぼうか。

人々は生活に即して、ものを美しくしたのである。

之こそは工芸の歩む道ではないか。

私たちはその美しさにひかれてゐる。

数々の教えをそこから学んでゐる。」

この一文がこざん刺し復興のきっかけを作ったと言っても過言ではありません。

柳宗悦氏らの勧めもあり財団法人木村産業研究所が

こざんについての基礎的研究に入り再興に努めました。

その後昭和37年(1962)に弘前こざん研究所に

引き継がれ現在に至っております。

